

若手教員の資質能力の向上を目指して

～若手教員自主学習サークルへの支援～

研修部キャリア形成研修チーム

赤澤達郎 中田政晴 井上定 牧野浩之

今後10年間で教員の約40%が退職する。これは経験年数の少ない教員が大量に誕生するということである。これまでは教員の力量は現場で養われることが多く、知識・技能は先輩教員から若手教員へ伝承される側面が強かった。しかし、今後はそれが困難になることが予想される。そこで教員としての実践的指導力やコミュニケーション力など基礎的な力を育成することを目指し、「若手教員自主学習サークル」（以後サークル）を立ち上げることにした。参加者数はのべ170名を超え、参加者の声を聞くと大変有意義なサークル活動であったようである。若手教員（初任者～3年目）を対象にアンケートを実施し、運営方法や内容等を再検討することでより充実したサークル活動につなげたいと考えている。

〈キーワード〉 教員の資質能力、学び続ける教員の確立、学びの場

I 主題設定の理由

右の図1は平成27年3月31日の時点における、福井県の公立学校教員の年齢分布である。平均年齢は45.2歳で、50歳以上の割合は40.9%となっている。これは今後10年間で教員の新旧入れ替えが大きく行われるということであり、若手教員の育成が急務であることを示している。

グローバル化や情報化、少子高齢化など社会の急激な変化に伴い、高度化・複雑化する諸課題への対応が必要となってきている。その中で学校教育においても、基礎的・基本的な知識・技能の習得に加え、思考力・判断力・表現力等の育成や学習意欲の向上、多様な人間関係を結んでいく力や他者と協働して課題解決を行う力等を重視することが求められている。中教審の初等中等教育分科会において、これからの教員に求められる資質能力について以下のように示されている。

- ① 教職に対する責任感、探究力、教職生活全体を通じて自主的に学び続ける力
 - ・使命感
 - ・責任感
 - ・教育的愛情
- ② 専門職としての高度な知識・技能
 - ・教科や教職に関する高度な専門的知識
 - ・新たな学びを展開できる実践的指導力
 - ・教科指導、生徒指導、学級経営等を的確に実践できる力
- ③ 総合的な人間力
 - ・豊かな人間性や社会性
 - ・コミュニケーション力

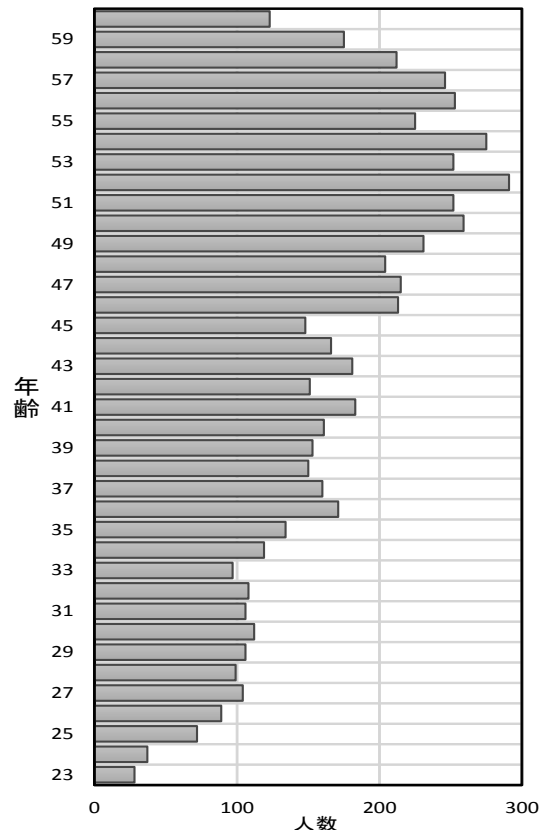


図1 平成26年度福井県公立学校教員年齢分布（平成27年3月31日現在年齢）

- ・同僚とチームで対応する力
- ・地域等と連携・協働する力

このことは平成24年3月に出された「教員研修の在り方検討会報告書」の中にも同様の記述が見られる。この報告書を受け、本県の基本研修において平成24年度から初任者、5年経験者、10年経験者によるクロスセッションが導入されている。また、平成25年度から初任者研修が初任者～3年目までの3年間の若手教員研修となり、基本研修の内容も大きく見直された。その中で教育実践研究が基本研修の柱となった。これは平成24年12月に福井県教育委員会から出された「学校全体の教育力向上に関する指針」の中で「教員の学びの場は、学校現場」と示されているように、校内の実践研究を中心に行うように転換してきているということである。言いかえると研修が各個人の主体性に負うところが大きくなっているということである。平成26年度には初めて2年目研修が実施されたが、受講者の中には2年目の不安を抱えている者が見られた。初任者の時には拠点校指導教員や校内指導教員の指導を受けることができたが、2年目には指導教員はついていない。2年目研修では、授業についてのテーマを設定し、省察の実践を課題としている。省察を行うためには一人でやるだけでなく、他の教員に授業を見てもらうことも大切である。しかし、先輩などの同僚に相談することを多忙という理由で躊躇することがあるのではないかと考える。

これらのことを踏まえ、研究所では若手教員が授業について相談したり悩みを共有したりするための学びの場として「若手教員自主学习サークル」を立ち上げた。サークル活動を通して、若手教員の授業力や協働実践力の向上を目指したいと考えて、本主題を設定した。

II 研究の目標

時代の変化に対応するためには、校内での研修が重要である。学力観がコンテンツベースからコンピテンシーベースへと変化する中で子どもの学びに根ざした授業研究が必須である。サークルの効果をより明確に把握するために若手教員（初任者～3年目）を対象にアンケートを実施し、その結果をもとにサークルの効果および今後の企画運営の在り方を探る。

III 研究の方法

福井県では基本研修において教員に求められる共通の資質能力を「豊かな人間性」「高い専門性（教科指導、生徒指導・進路指導等）」「マネジメント」「変化への対応」の4項目とし、それぞれの項目ごとに研修内容を設定している。これらの内容について基本研修クロスセッションで事後アンケートを実施している。このアンケートをサークル参加者にも実施した。また、参加の有無にかかわらず、サークルの開催日や会場、内容等についても調査した。その結果を集計分析し、そこから明らかになった課題を次年度のサークルの運営の改善につなげていく。

IV 研究の内容

1 サークルを立ち上げる際の基本的な考え

現在の子どもたちを取り巻く教育的課題は山積している。そして先行き不透明な社会に対するこれからの教育において教員に求められる資質能力がより高度になっていることも間違いない。しかしながら、同時に日本の教員は平成25年の国際教員指導環境調査（TALIS）にも示されたように多忙を極めている。同調査の中で「職能開発への参加の障壁」として高い割合となっているのが「日程が自分の仕事のスケジュールと合わない」である。こうした状況の中で、時間のない教員が効果的に学び、自らの資質能力を向上させるには、教師自らが主体的に学ぶ場を創出することが重要である。次期学習指導要領改訂に向けたキーワードとしてアクティブ・ラーニングに焦点が当たっている。子どもたちに主体的で協働的な学びを創出するには、教員自身が主体的で協働的に学んでいなくてはならない。これからの教員に求められる資質として「学び続ける教員像」という言葉が掲げられている理由は、多様化していく課題に

教員も子どもも自ら考え、実践していく力が必要だからである。本県の基本研修において、近年グループ協議を多く取り入れ、学校現場で実践研究主体の研修を行うようになってきている。多様化し複雑化した教育的課題に対応するためにはそれぞれの教員が目の前の子どもたちや学校の状況を正確に把握し、適切に判断し、確実に実践していく力を身に付ける必要がある。そのためには各学校での同僚性が欠かせないが、学校を超えた地域や全県的な同僚性も大切である。実践研究は各学校現場の状況や自主性に任されるため、取組みの過程や深まりが見えにくく、支援しにくいという課題がある。基本研修などの悉皆研修では、全ての教員を対象に研修を行うことができるが、全県から集まる同年代の教員が一度に学ぶ場では校種や教科、学年が異なる個別のニーズに対応することが難しい。

そもそも教員は主体的に学ぶ存在であるため、物理的あるいは心理的な負担が少なく、意義のある学びの場があれば学びたいという教員は多いはずである。また、学校や教科の状況は様々で小規模校で同世代がない、あるいは大規模校でも教員数が少ない教科であるなど、同世代との学び合いへのニーズは少なくないはずである。学び合いの前段階、つまり、連絡調整や会場の手続き、運営など現場の先生方に負担になるところを教育研究所が担い場の設定をすることで、教員が参加しやすくなり、参加しさえすれば主体的で協働的な学び合いが行えるという状況をつくることができる。組織的に負担を強いる形ではなく、主体的に学ぶ教員を下支えする仕組みづくりが大切である。また、個別のニーズに対応できていない研修では個人のモチベーションが上がらない。

サークルは小中高の各校種、さらに各教科と多岐にわたるため、所内に若手教員自主学习サークルワーキンググループ（以下WG）を立ち上げ、全所体制で対応することとした。WGではサークルの基本方針について以下のことを確認した。

サークルの基本方針

<目的>

- (1) 若手教員に求められる資質能力の向上を図る。
 - ・授業実践研究による授業力の向上
 - ・協働実践力の向上
- (2) 若手教員に学び続けることの意識化を図る。
 - ・自主学习サークルに参加することにより自己研鑽の意識化
 - ・教員ネットワークによる授業改善の定常化

<対象者>

若手教員研修受講者（初任者～3年目）
5年経験者研修受講者

<運営>


校種、地区、教科を考慮し、グループを作る。
小学校は主に地区を、中学校・高校は教科を重視する。
研究所員も参加し、最初は研究所員が主体で行い、その後、自主開催に移行。

いっしょに学ぼう！

若手教員自主学习サークル 参加者募集

「実践研究について聞きたいけど、職場では時間がとれない。」「同じ教科の先生がいない。」「気軽に相談できる同世代の人が近くにいたらいいのに…。」という人はいませんか？ そんな若手教員たちが集まって気軽に相談できる勉強会に、参加しましょう。皆さんの活動を教育研究所が応援します！

初任研、2年目、3年目の各研修の「実践研究」をもとに深めていきます。ぜひ、ご参加ください。



<目的>

- (1) 若手教員に求められる資質能力の向上を図る。
 - ・授業実践研究による授業力向上
 - ・協働実践力の向上
- (2) 若手教員に学び続けることの意識化を図る。
 - ・自主学习サークルに参加することにより自己研鑽の意識化
 - ・教員ネットワークによる授業改善の定常化

<対象> 若手教員研修受講者（初任者～3年目）受講者

<日時・会場> 第1回は参加者と相談の上、決定。（詳細は決定次第、メール等にて連絡します。）
時間は夕方2時間程度、会場は福井県教育研究所、青少年センター等を予定

<申込> 申込用紙（裏面）により教育研究所へ随時申し込んでください。

<備考> 校種や教科、地域ごとに近い人同士集まり、自主的な学習会を実施します。
小学校は地域ごと、中高は教科ごとに実施します。特別支援教育は対応できませんのでご了承ください。
継続的に参加できる方を募集します。対象者以外の申込も受け付けます。
軽食を持ち寄るなどして、自由な雰囲気での話し合いをしましょう。

<問い合わせ> 福井県教育研究所 研修部
電話：0776-36-4857 FAX：0776-36-4860 E-mail：kensyubu@fec.fukui-c.ed.jp

図2 参加者募集のチラシ

基本研修への参加は業務であり出張扱いとなるが、サークルへの参加はあくまで自主的なものであり出張とはならない。また、休日は部活動があり参加は難しい。よってサークルの開催時間は平日の夕方2時間程度の時間を設定することとした。勤務時間後早めに職場を離れ、近隣の学校や教育研究所での

サークルに参加する。

2 サークル立ち上げへの準備

サークルの参加者募集については基本研修時に図2のチラシを配付し、趣旨説明を行った。それと同時期に校長会や市町教育委員会、指導主事訪問時に研究所の事業として説明し、参加者が参加しやすいように配慮した。そして、できるだけ同じ地域や教科の教員が集まり、サークルを作れるようにするために、各担当所員から個別に声かけを行った。当初、小学校や中学校の教員には各学校での校内研修がしっかり行われていることや小学校教育研究会、中学校教育研究会といった任意団体を中心となって自主的な研修を行っているということであまり強力には呼びかけなかった。高校も同様に高等学校教育研究会を中心となって研究や研修を行っているが、小・中学校ほどではないということに加え、昨今の大学入試改革や高等学校教育の改革が挙げられていることもあり、主な対象を高等学校の教員と据え、活動を行うことにした。そして4月末頃から順次活動できるサークルから活動を開始した。

表1 サークル運営立ち上げまでの流れ

月日		趣旨説明	研究所	備考	
4月	1日	水	初任者研修		
	3日	金	市町指導主事連絡協議会		
	9日	木	初任研実施校連絡会（義務）	（7日会議）	
	10日	金	初任研実施校連絡会（県立）		
	13日	月	新任校長研修	WG	参加者募集強化週間
	14日	火		所内担当者会 メールでの勧誘開始	
	16日	木	新任教頭研修	電話での勧誘開始	
	17日	金	市町小中校長会（～5月） 県立校長会		
	21日	火	2年目研修（嶺北会場）		サークルごとに活動開始
5月	11日	月		WG	指導主事学校訪問において 事業説明
	18日	木		所内担当者会	
	22日	金	3年目研修		
10月	21日	水		WG	
	26日	月		所内担当者会	

3 各サークルの活動状況

今年度の各サークルごとの活動は、次の表2にまとめた。表2のように活動時期は、年度当初や長期休業中に多い。若手教員に戸惑いや不安などがある年度当初や学期末にニーズがあると思われる。今年度サークル数は21を数え、実施回数は50回を超えた。また、参加者数はのべ170人を超え、初年度としてはまずまずだと思われる。しかしながら、まだまだ少数である背景には、教育研究所のイメージがあるのではないだろうか。教育研究所は教員研修などを行う機関であり、教員に対し指導をする組織だと思われる。「若手教員自主学習サークル」も本当に自主性に任されたものなのか訝しむ向きもあるのではないかと。しかしながら、新学習指導要領に向けた教育改革が子どもたちに本物の学びを求める動きだとすれば、これからの教員に求められているものは本物の力量形成とも言えよう。よって今後も時間がかかることが想定されるが、無理をせず若手教員の必要性から出発し、真に主体的な学習会として継続、発展させていきたいと考えている。

表2 各サークルの活動状況

			4月	5月	6月	7月	8月	9月	10月	11月	12月	1月	合計
1	福井市 小学校	実施回数		1	1			1		1			4
		参加人数		2	2			2		2			
2	南越前 小中学校	実施回数	1		1		1		1	1			5
		参加人数	5		6		5		5	5			
3	小浜市 小学校	実施回数		1									1
		参加人数		1									
4	国語 高校	実施回数			1		1				1		3
		参加人数			3		4				5		
5	世界史 高校	実施回数			1	1				1			3
		参加人数			3	7				5			
6	日地公 中・高	実施回数		1	1								2
		参加人数		3	2								
7	公民 高校	実施回数					1		1				2
		参加人数					1		5				
8	日本史 高校	実施回数					1		1				2
		参加人数					2		3				
9	数学1 高校	実施回数		1		1					1		3
		参加人数		5		4					5		
10	数学2 高校	実施回数		1	1				2	1			5
		参加人数		3	4				9	7			
11	数学3 中学校	実施回数					1						1
		参加人数					3						
12	理科1 高校	実施回数		1	1				1	1			4
		参加人数		2	5				2	3			
13	理科2 高校	実施回数							1	1			2
		参加人数							2	2			
14	理科3 高校	実施回数		1	1					1			3
		参加人数		2	2					2			
15	英語 高校	実施回数		1		1	1						3
		参加人数		4		3	2						
16	美術 中学校	実施回数			1								1
		参加人数			2								
17	技術 中学校	実施回数			1		1			1			3
		参加人数			2		2			1			
18	家庭 中・高	実施回数							1				1
		参加人数							2				
19	保健体育 高校	実施回数			1								1
		参加人数			2								
20	工業 高校	実施回数		1	1					1			3
		参加人数		3	3						1		
21	養護教諭	実施回数			1								1
		参加人数			5								
	合計	実施回数	1	9	13	3	7	1	8	9	2	0	53
		参加人数	5	25	41	14	19	2	28	28	10	0	172

高校を中心にサークルができていくことがわかる。県立学校には「ガールーン」というネットワークがあり、各個人ごとにメールアドレスが設定されている。このため所員から直接各個人を勧誘することができた。また、南越前町は南越地方教育委員会連絡協議会の指導主事が管内（南越前町、池田町）の学校から希望者を募り、所員と協働して開催することができた。学校を通して募集をしたため、管理職の理解も得られ、勤務時間内での開催が可能となった。



サークルへの参加は3年目までの者がほとんどであるが、8月に5経年者から参加希望者を募った。それにより、社会科において2年目と5経年者による夏休み合同サークルを開催することができた。5経年者にとっては初めてのサークルで2年目の実践を聞き、とても刺激を受けたそうでその後の感想を次のように書いている。

地歴・公民科3名と、少人数の参加でしたが、その分濃い時間を過ごすことができました。特に2年目の先生と、専門の日本史の授業について語り合えたことが大きかったです。2年目でありながら、生徒の主体性を育てる様々な取組みをされており、大変刺激を受けました。同期で語り合うことももちろん大切ですが、今回のように異なる世代の方と交流することも、視野を広げるためには大切であると実感しました。

また、自主参加ということで、「研修をやらされている」という感覚は全くなく、「これからも自ら進んで学んでいこう」という意識が強くなりました。このような機会を設けてくださったことに感謝しています。

下の表3は、いくつかのサークルの主な活動内容である。内容については参加者から希望を聞き、それに即したものとしている。それぞれの校種の特徴がよく表れた内容となっていることがわかる。

表3 主なサークルの活動内容

小学校	<ul style="list-style-type: none"> ・授業づくりや道徳教育、英語の授業づくりについて ・学校の業務に関する事や保護者懇談会について ・アクティブ・ラーニングと地域を活用した教材づくり ・低学年の生活支援や気がかりな児童への支援について
高校 数学	<ul style="list-style-type: none"> ・平成27年度大学入試センター試験の振り返り ・入試問題(回転体の体積)とICT、教科書(複素数平面)大学入試(ベクトル)の指導法 ・数学Ⅰ(不等式)、数学Ⅱ(軌跡) 考查問題検討 ・「導入」の成功例や失敗例に関して
高校 社会	<ul style="list-style-type: none"> ・授業づくりやテストづくりに関する事、学力観の変化について ・探究学習「テーマ史」、生徒目線の題材考案、実践や教材について協議 ・主権者教育、シティズンシップ教育、功利主義など ・ALについて、戦後史、現代史「キリスト教文明圏とイスラーム文化圏の対立」 ・生徒指導について
高校 理科	<ul style="list-style-type: none"> ・授業の課題、指導のポイント(教員OBと共に)、板書、声量、表情、生徒の心、安全面 ・センター入試問題、題意、観点 ・中間考査の振り返り、指導内容と正答との関係 ・物理や化学の指導のポイント

4 アンケートの実施と結果

(1) サークルの効果

表4は参加者に実施したアンケートの結果である。サークルに参加したことで、自分の中で効果があったと思われることについて実感した場合は◎、○で記入してもらった。(これは基本研修の教員に求められる資質能力の4項目をもとにしたアンケートである)

結果を見ると、教科指導のポイントが高いことがわかる。また、豊かな人間性の教職全般についても高くなっている。このことは、サークルの目的である、授業力の向上や自己研鑽の意識化につながるものである。さらに、マネジメントについても比較的ポイントが高くなっている。これは組織の一員としての在り方を見直す機会となっていることであろう。これも協働実践力の向上につながることであり、サークルの目的に合致することである。サークルが参加者にとって有意義だったことはアン

ケートの4項目からだけでなく、サークルに参加した感想からも見て取れることであり、所員も実感しているところである。

表4 若手教員自主学習サークル自己評価表

成長をはかろう！[若手サークル自己評価表]アンケート項目
「サークルに参加したことで、効果のあった項目に自己評価で丸◎、○を記入してください」

評価項目	評価する事項	ポイント	
豊かな人間性	① (教職全般) 教員としての使命感、高い倫理観や幅広い視野、教養を身に付けることができるようになった。	36	
	② (教職全般) 本県や勤務校の教育の現状と課題について理解することができるようになった。	39	
	③ (人権教育) 人権問題について正しく理解するとともに、確かな人権感覚を身につけることができるようになった。	12	
高い専門性	教科指導	④ (計画) 全員参加の授業づくりに努め、個別指導やグループ別指導など個に応じた指導方法を工夫できるようになった。	44
		⑤ (授業) 内容に応じ、体験的な学習や問題解決的な学習を重視するとともに、児童・生徒の興味・関心を生かし、自主的・自発的な学習が促されるように工夫できるようになった。	46
		⑥ (ICT活用) 補助教材、視聴覚教材やICT機器など教材・教具を適切に活用し、授業方法を工夫できるようになった。	31
		⑦ (学級・児童・生徒把握) 学級全体や個々の児童・生徒の理解度を把握し、修正や改善を行うことができるようになった。	37
		⑧ (評価) 評価を工夫し、指導の改善や学習意欲の向上に生かすようにできるようになった。	36
		⑨ (言語活動) 言語に対する理解や関心を深め、言語環境を整えることを通して、児童・生徒の言語活動が適切に行われるように配慮できるようになった。	36
		⑩ (家庭学習) 家庭学習など児童・生徒の自主的な学習態度の育成に取り組むことが出来るようになった。	24
	生徒指導・進路指導	⑪ (進路指導) 児童・生徒が自己の在り方や生き方を考え、主体的に進路を選択できるように指導できるようになった。	15
		⑫ (生徒指導) 生徒指導について十分に理解し、指導の充実に向けた考え方を明確にできるようになった。	23
		⑬ (生徒指導) 教育相談の手法を理解し、教師と児童・生徒の信頼関係および、児童・生徒相互の好ましい人間関係づくりを適切に進めることができるようになった。	17
⑭ (生徒指導) 気になる児童・生徒や軽度の発達障害などを把握し、障害のある児童・生徒の教育ニーズを把握するようになった。		23	
マネジメント	⑮ (組織マネジメント・協働) 組織の役割を理解し、組織の一員として他の教員と連携協力すると共に、報告・連絡・相談を適切に行うことができるようになった。	25	
	⑯ (自己マネジメント) 個人の役割を理解し、自己マネジメント能力を身につけるようになった。	26	
変化への対応	⑰ (今日的課題) 校種間連携など今日的課題に対して、積極的に取り組むようになった。	26	
	⑱ (危機管理) 普段から児童や生徒の安全に配慮し、事故や問題に適切に対応し、個人情報保護などを意識するようになった。	23	
	⑲ (家庭・地域・関係機関との連携) 家庭や地域、学校外の関連機関との連携・協力が適切に行われるようになった。	15	
	⑳ (社会の動向への対応) 社会の動きに対応して、指導に新たな工夫・改善を取り入れることができるようになった。	23	

表中のポイント、記入された◎を2ポイント、○を1ポイントとしてカウントしたもの

<サークルに参加した感想>

- ・授業の教材づくりの手助けとなることや自分のモチベーションのアップに繋がりました。
- ・若手の先生の精力的な授業の取組みが聞けて、こちらも良い刺激になりました。
- ・数学科の教員は積極的に参加する先生方が多く、毎回活発な意見交換ができており、有意義でした。
- ・同校種・同教科であるため、教科の専門性について実践交流をすることができ、明日からでも実践することができるご助言やご指導をいただくことができました。
- ・研究所の先生方がファシリテーターとしていらっしゃり、他県や他校の実践事例や国の教育動向などの最新の情報を踏まえながら、実践交流をすることができました。
- ・他校の実践（DVDで鑑賞）が見れたのは、ためになりました。できれば、それについて少しでもつつこんで話し合いたかったです。
- ・違った授業の視点を学ぶことができたり、色々な先生方のご意見を賜わり、有意義な時間を過ごさせていただきました。

- ・3～5人程度の少人数のグループでの研修であり、それぞれの実践にじっくりと耳を傾けながら、自分の実践を振り返ったり、交流したりすることで、深めていくことができました。
- ・サークルでは、若手、ベテランの両方の目線で解決策が出てくるので自分にとっては取っつきやすく実践につなげやすくなっています。
- ・この時間がすごく好きでした。同じ学校には若い先生はあまりいないので、ほぼ同じ年の先生と同じ立場の先生とよい意味で気をつかわず話すことができたからです。
- ・それぞれの先生方の個性が出て、グループ討論などのような形式と違った、サークルのようなこの話し合いがとてもよかった。
- ・異動してきてあまり知っている先生がいなかったもので、こうして年の近い先生方と関わる機会があってありがたかったです。

<所員の感想>

- ・参加者が好意的に毎回出席してくれたので楽しく取り組みました。
- ・若い先生方もさることながら、ゲストティーチャーとして招いた中堅の先生方も授業改善のヒントやアクティブ・ラーニングに対する関心が高く、何かしら専門科目の集まりを欲していることが感じられました。
- ・考査問題や授業について話し合い、実りのある回を重ねることができました。
- ・年度初めに参加者から内容の希望を聞いて開催していたので、参加意欲も高かったようです。また、こちらからも参考となる資料などを用意することができました。

(2) サークルの在り方の検証

下の図3～5はそれぞれ実施日、時間、場所について調査した結果である。

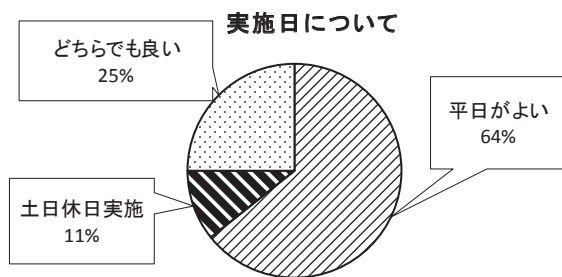


図3 実施日

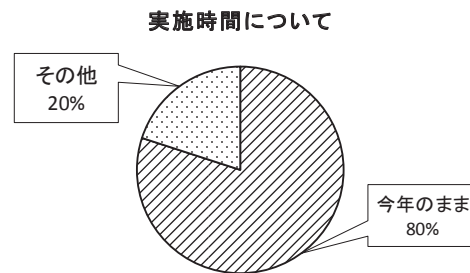


図4 実施時間

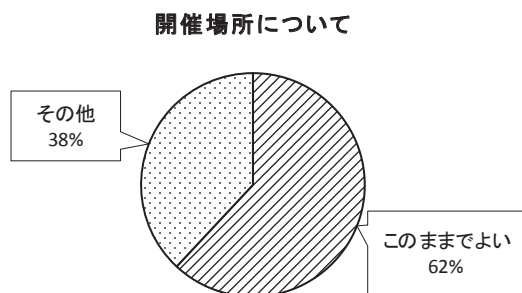


図5 開催場所

実施日時については概ねよかったことが伺える。実施日では特に高校の場合、考査期間に実施したものも多く、部活動などを気にせず参加できた。時間については、勤務終了後の実施だったが、開催場所から遠い参加者にとっては負担を感じていたものもいるようである。これについては開催場所を含め、考えていく必要がある。

さらに、参加できなかった理由についても調査した。その結果が表5である。

表5 参加できない理由

	参加できなかった理由	人 数			
		初任者	2年目	3年目	合計
1	時間確保の困難(教科指導、生徒指導、部活指導、校務分掌など)	52	54	48	154
2	開催予定との不一致(業務、行事などとの重なり)	10	19	10	39
3	距離的問題	13	9	12	34
4	サークルの情報不足(内容、開催予定、参加基準など)	11	0	20	31
5	サークル以外の支援あり(他のサークル、校内での支援など)	10	12	3	25
6	参加意欲の不足(関心がない、他に支援を受けられるなど)	8	10	6	24

勤務時間外の開催であったが、時間的な余裕がないことが改めて浮き彫りとなった。先述にもあるように教員の職能開発について、その時間を生み出すための業務の見直しは喫緊の課題である。

次に若手教員がサークルに対して望んでいる内容が表6である。

表6 希望するサークルの内容

<p><内容に関すること></p> <ul style="list-style-type: none"> ・授業の進め方、教材の作り方などの紹介 ・授業名人のような方に実践例を教えていただけるような機会 ・各学校の情報交換の場、学習指導に有効な教材の共有の場 ・模擬授業をして、他の先生方や授業名人の方に見ていただいてアドバイス ・I C T機器での利用方法 ・各学校で先輩の先生や自分で学んだ具体的な実践例の共有 ・福井県以外の都道府県で行われている教育実践例などの紹介 ・学校で実践できる教育技術や仕事術 ・仕事の効率を上げるためのコツなど ・最近の各学校の状況や悩みなど ・特別支援学級担任だったので、特支研究会 ・気がかりな児童に対する支援の方法などのアドバイス <p><運営に関すること></p> <ul style="list-style-type: none"> ・同じ校種、同じ教科の先生と教科指導についての話し合い ・他教科との交流、校種関係なく、意見の交換が出来る場 ・内容よりも、若手で集まれる場 ・特別支援についても、研究所主体で研修を受けられるような体制 ・忙しい先生にも参加できたり、できなくても内容がすこしでも分かたりする配慮 ・夏休みなど長期休暇のときの開催 ・授業実践等についてメールやFe-netで相談できる場 ・ネット中継 ・それぞれに学びたいことが異なるため、個人での自主的な学びへの支援

希望内容を見ると多岐にわたっていることがわかる。特に若手教員において日々行われる授業に関しては切実な願いであろう。また、自分の勤務校種や専門教科だけの集まりだけではなく、異校種や他教科とのサークルを希望している声がある。専門教科の集まりであれば、より深く研究は進んで行くであろう。ただ、次期学習指導要領でも言われているように、これからの学習は知識の獲得が目的ではなく、

正解のないことについて他者と知識を分かち合い、いろいろな条件から可能性を探したり、様々な立場に立って想像したりしながらお互いに納得し合える答えを見いだしていくプロセスが重要である。様々な視点に立って物事を見ていくということを考えると異校種、他教科との協働を視野に入れることも必要かもしれない。また、今年度は始まりということもあり特別支援学級・学校については対象としなかった。特別支援教育については現場の教員にとって喫緊の課題であり、研究所だけでなく他機関との連携も含めて考えていく必要があるだろう。

最後に次年度の参加希望を示したものが図6である。今年度のサークル参加者は次年度も参加したいと答えたものが多かった。参加しての手応えを感じているのであろう。

「参加したいが状況による」と答えた者が約80%いる。これは参加できなかった理由と大きく関連していることである。いかに参加しやすい環境をつくり出していくかが、現場の先生方の切実な願いであらう。

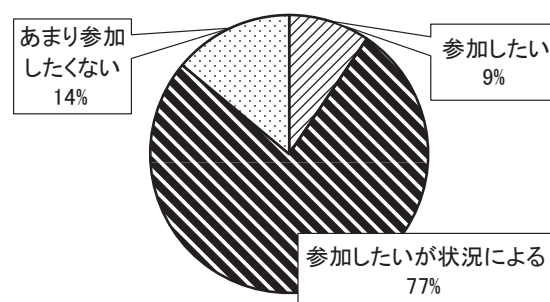


図6 次年度の参加者希望

V 研究のまとめ

1 成果

参加者の感想、アンケート結果からもわかるようにサークルは有意義だったことがわかる。授業実践についての指針や他の教育活動についての学びを得ることができていたようである。同じ教科の教員が集まることでより専門的な話、深い話をするのができた。特に校内に同じ教科担当が少ない場合にはよい機会となったのではないだろうか。また、学校現場を離れて同じ若手とざっくばらんに話し合える機会としてもよかったのではないだろうか。初任者研修、2年目研修、3年目研修と同年代の教員が同じ研修をする場はあるが、その場とは違った雰囲気がある。肩の荷を下ろし、普段感じている悩みや思いを話す機会となった。

2 課題

サークルはあくまで自主的なものである。今年度の参加者の多くは次年度も参加したいという希望が高い。しかし約8割の先生方が「参加したいが状況による」と答えている。特に多くの者が挙げている多忙、開催場所の課題を克服していく必要がある。参加しやすい時期・時間・場所の検討を要する。そのためにも授業名人等にも協力を依頼するなど各地域との連携協力の在り方を探っていく必要があるだろう。今年度、県外経験者の新採用にも希望者がいた。「県外で経験があったとしても、福井の現場は初めてで非常に不安だ」ということを話していた。県外経験者に限らず、現場の教員は様々な悩みを抱えていることだろう。それらを吸い上げ、サークル活動に役立て、若手教員が安心して子どもたちの前に立てるように支援の在り方を探っていきたい。

また、サークルに限らず学校の中に「若手教員を育てる仕組みをどう構築していくか」が現場には求められる。教員のライフステージに応じて求められる資質能力について考えたとき、若手教員については特に「授業ができる」ことが挙げられる。校内研修の充実、協働体制の構築など課題は多い。先述のとおり初任者については指導体制は手厚く行われているが、2年目、3年目になると薄くなる。そう考えるともう少し、2年目、3年目の教員のサークルへの参加が増えてくることが望ましい。研究所としては今年度の参加者の継続した参加を促すとともに、参加しやすい体制づくりに取り組んでいかなければならない。